愈々は城渡しも相濟みましたに依り之れから義士銘々傳へ轉りませう尤も孰れも義黨の面々では座いますれば誰れが忠義が重く誰れが輕いと云ふ筈はない併し其内でも言行の内に面白き咄しのある人と咄しの無い人がある……スラリと何の苦もなく成長つた人には幼年の内からの咄でも平々凡々で愉快な事實はありません併し幼年の時から家が貧乏だとか父の仇でも討つたとか云ふやうな人には云ふに云はれぬ辛苦があつて實に意想外の事が隨分あります……エヽ爰に言上いたしますのは村松三太夫が父を扶けて入城いたしたるお咄でムひます一体三太夫は兄弟二人で御座いまして三太夫は長男で次男は政右衛門と申されました父を喜兵衛と云ひナカ〳〵忠義一徹な人物では座いました然るに此度主君内匠頭殿中刃傷に及びお家改

易と云ふ事を承知いたし 喜兵「實に情ない事になつた嘸や御國表は一方ならぬ騒動であらうが何樣大石内藏之助殿と云ふ大智大勇の方が出なさればソウ〳〵暗々と城を渡すやうな事もなからう某も百石の知行を頂き今日まで何一ッ不足なく暮して往かれたのも孰れも殿の影だ夫れを思へば萬一籠城でもいたすなら軍勢の中に走せ加はり一方の防矢でもいたさん」と思ひ立つてはナカ〳〵猶豫いたしては居られませんに依り二人の悴を一間に呼び 喜兵「三太夫……三太「ハイ……何は用で座いますか唯今弟も參りますで御座いませう 喜兵「左樣か併し何をグヅ〳〵致して居るか直ぐ參れと申して連れて參れ 三太「ハイ……ダガ唯今母上の御用をいたして居ります故 喜兵「ナニ母の用など跡でも宜しい急々両人に相談があ

るのだ」ソコデ三太夫は弟政右衛門を召連れて參りますと 喜兵「呼んだのは外でも無い篤と両人に申聞すことがある……今度の大變に就ては定めし赤穗城に於て大石殿軍略を巡らし籠城の御用意あるとゝ存ずる決してムザ〳〵上へ城渡しをいたす氣遣ひはない左すれば此父は之れより直に軍勢の中に走せ加はり濠の埋草とも相成るか又は矢玉鉄砲玉の的とも相成り主君萬分の一の御恩を報じたいと思ふ夫に付き其方一人は殘りて母を養ひ一人は敵上野介に忍ひ寄り一太刀なりとも恨みて殿の御無念を散ぜるやういたせ今生の別れであれば之れより一同盞をいたさん用意に及べ」二人の兄弟も忠義の志は父に劣ることは御座いません故決して止めはしない直に別の盞を汲みましたが老年の喜兵衛は具足櫃と槍一筋を携へ 喜兵「去

らば之れにて暇申すぞ唯今申付けた一言必ず相守り忘却いたしては相成らんぞ」と云ふや否や勇ましく家出をいたしました跡に殘つた母親並に二人の兄弟は如何に氣丈とは云へ取る年では座いますに依つて頻りに心配いたし 三太「如何だい政右衛門アヽして父上は元氣よく御出立になつたけれど一里や二里の處ではなし山河越えて參らねばならぬ處、何うも父上一人長途の旅は心元なく思ふ夫れ故二人の中一人は母親の許に仕へ一人は父上の御供を致さうでは無いか」母親は之れを聞いて 母「お前達の云ふ處は此母を思つて一人當地に殘らうと云ふのであらうが夫れは必ず無用にいたすが宜い二人ながら父上のお供をいたし若し籠城の御評議で寄せ來る敵を拒ぐ場合であつたなら命は毫毛より輕くし充分に働いて天晴なる討死をいたし

て貰ひたい……サア二人とも直に父上の後跡を慕ひ奉供すが宜らう」と夫に連れ添ふ妻の志ナカ〳〵感心な者である併し父上だからは先途を見届けねばならず母上だから何うでも宜いと云ふ譯は無い一人は父上のお供をいたし一人は母上のお傍に侍る夫れが一番上策で御座いますから色々母親を慰め三太「ナニしても一人は殘ることに致しませう萬一の時には再び赤穗城へ乗込むとも取敢ず二人の内で取圖をいたし當つたものは父上のお供をすると云ふことに致さん」とソコで兄弟は一間の内へ這入りましたが軈て二人は闘取りも濟んだと見て母の前へ出で三太「母上……斯ふいふことに定りました拙者は父上のお供を申し弟政右衛門が跡に殘つて母上を奉養申すことになりましては座います 母「左樣か夫れでは爾う極め

たが宜いでしやう」之れより三太夫は早速身支度に及び兼て正逆の時の用意いたしたる具足櫃並に鎗を取出し飛ぶが如くに父喜兵衛の後を慕ひました、丁度鈴ケ森まで參りますと喜兵衛は波打際に休んで居る 三太「お父上……若しは父上……」父「ヤ、怜か今頃何用あつて參つたアレ程申付けて置いたのに不届者奴が……」突然頭ごなしだ、ケレども三太夫は平生父の氣象を克く存じて居ります事故 三太「成程お父上のは叱りは尤千萬には座いまするが實は之れ〳〵斯〳〵の次第である」と母親とも相談いたし弟政右衛門と闘取りで參つた事を詳しく物語りましたので父も初めて怒を納め父「左樣なれば早速供をいたせ」と云つて又も之より路を急ぎましたなれどナニシロ老躰の事では座います故兎角足が捗々しく進まな

い三太夫は殊に父の爲め駕籠を雇ひなどいたし漸く赤穂へ着いたしましたから之より内藏之助の許へ案内して喜兵衛父子の志を述べますと内藏之助も深く老人の忠義を感じ又三太夫兄弟が忠孝の行ひを聞いていよ〳〵感激し暫し悲歎の涙に暮れましたけれどナニシテも籠城の議は撤回され城明渡しと云ふことになりましたので茲に内藏之助は窃かに義黨の概略を物語り喜兵衛老人も大に之れを贊成いたしました後翌年十二月十四日吉良家討入りの折玄關のまいら戸を打破つて名乘りかけたのは即此村松三太夫でゐ座いました

第十九席

（矢頭右衛門七）

内匠頭の浮家臣で知行百石を頂戴いたしたる矢頭長助と云ふ忠

臣がゐ座いましたが主君長矩のゐ無念に對しては是非一刀なりとも敵上野介を恨まんとの念は忘るゝ暇なく同盟の中に加はりましたけれど如何んせん取る老波には爭はれず殊には元祿十四年の秋の頃よりして兎角病氣勝ちでゐ座います　長助「殘念なる哉今にもあれ大石殿よりゐ通知があれば一番乘は此長助と思ひ居りしに言ひ甲斐なくも此病ひでは迚もゐ供は叶ひ難し」と心中頻りに嘆息をいたし居りましたが切めて今一度本復の上仝じ捨る命なら上野介に一太刀恨を返した上潔よく切腹いたさんものと藥養手當をいたし居りましても益々病は重る斗り……迚も本復覺束なしと思ひたるにより一子右衛門七當年十六才に相成りますが病間へ呼び入れ　父「其方之れより大石殿の處へ參り何共ヲ兼ねたる次第にはゐ座るが最早臨終も程近

く今はの際に是非一目お目に懸りたき故ぼ越し下さるやうにとぼ願ひヤして參れ……が若しぼ出で下さらぬとあれば據どころなき事故歸りに駕籠をヤ付けて參るやうに 右衛門「承知いたしまして侍座います早速之れより參りますすでぼ座いませう」と右衛門七は大石殿の浪宅へ參り父の咄したる一伍一什を述べますと 内藏「イヤ〳〵夫れは參る位は雜作もない事だ直ぐ之れより伺うことにしやう……ヤア宜いや其方は緩りいたして參れ悴主税も居る故遊んで居るが宜らう 右衛「ハイ有難う存じますが侍出でを願へますれば手前お供をいたしますで侍座いませう 内藏「左樣か夫れでは直樣仝道いたさん」と之れから矢頭長助の宅へ參り病間へ通りますと 右衛「お父上大石樣が侍出で下されました 長助「ヲヽ左樣か之は〳〵斯く見苦しき病

床へぼ通りを願つては何共恐入ました次第……殊に某よりお訪ねヤすべきを態々侍足勞を願ひましては妙理にも盡きた次第と存ぜれど何分にも室内さへ歩行の出來兼る場合……飛んだ失禮をいたしました 内藏「ナンノ〳〵其お詞では却て恐縮いたす……併しぼ病氣は如何であるか必ず力を落さぬやうに藥用が專一で侍座るぞ病は氣からとかヤせば氣を確乎持てば決して病の起るものではないと迄ヤすなの日頃の元氣を出して弱い氣を出さぬが宜い 長助「有難きお言葉には侍座いますれど最早定まる命……就ては爰に一ッ一生のぼ願ひが侍座います夫れは外にもぼ座いませぬが兼て一味連判いたし亡君のぼ無念を晴さんと存ずれど今ヤ上る通り今日か明日かの命故迚も今生では怨を報ゆる事も出來ますまいと存じます然るとき

は折角の決心も水の泡之れが如何にも殘念故願はくは悴右衛門七若年者にて却つて足手纏ひとは存じますれど某の名代に連判の内へ加へ下されば子息主税殿のお供ともいたさせて下さらば此上の面目はお座いませぬ死後の本懷此事宜しくお取斗らひ下さるやう」と涙乍らに頼みます忠士の志しを聞及んだる内藏之助暫し言葉もなく共に涙に暮れたるが「内藏「死後に我子を留めて亡君のお恨を晴さしめんとするお老人の胸中お察し申す……我子の爲めには死せよと願ふ者は誰一人もお座らぬ仮令我身を殺しても我子には無事息才を祈るのが親の情然るに我身を留めて親の志を繼がせ死ねよと敎ゆるお志内藏之助感服の外はお座いませぬ……宜しうお座る確かにお引受けヤした討入りのときは悴主税と相比び陣頭一番に進ませるやう

屹度取斗らうでお座いませうお氣遣ひあるな」と世にも頼母しき内藏之助の一言に長助は涙嘔きあへず右衛門七の手を執り 長助「コレ右衛門七大石殿のお言葉を承つたか厚き思召の程必ず〳〵相忘れてはなりませんぞ亡君の御志をつぎ敵上野介奴を一太刀たりとも怨みねば子ではないぞ親では無い例令之れより幾年の間辛苦艱難いたすとも大石殿の御指圖を守り忠義の志を勵げむが宜なう縱令此父が無き後にても大石殿を父と頼み萬事御言葉を背いてはなりませんぞ」と悉〳〵敎訓に及びますを内藏之助は悉く長助をなぐさめ 内藏「御子息の事は某し御引受けヤしたれと御病氣とても全快いたさぬと云ふ事はない醫藥專一に保養いたしたら共に嬉しき討入もいたされるでお座らう夫れを樂しみと心靜かにお養生いたさるゝが宜い」とヤ

して之れから内藏之助は立歸りましたが氣の緩みにや遂に夫れより、二日程經つて惜や黄泉の客と相成りました右衛門七の愁傷は眼も當てられぬ程でありますが之れは實に尤な次第……内藏之助も此知らせを聞いて葬儀萬端の差圖をいたし厚く野邊送りもいたしましたが右衛門七は幼年の事で此座いますれば別に浪宅を張る必要もなく内藏之助の許に引き取られましたナニシロ父長助が忠義一徹の志でありますれば右衛門七にも幼少の折より武術を仕込み劔術は若年に肖合はず一刀流の奥儀を極めて居るし軍學の道にも明るき故内藏之助も頼もしく思ひ何事も我子の如くにいたし遣はすので右衛門七も父とも思ひ主とも思つて内藏之助に仕へましたケレども内藏之助浪宅へは吉良並に上杉家の間者が多く入り込み様子を探りに參りす

すので悉く身元放埒にいたして居る主税と雖も其通り……然るに今血氣盛んの右衛門七を永く我家へ置くときは酒色の道を教ゆるやうなもの去すれば忠義の志を次第に薄がせ放蕩者にならんとも限らない已れは心あつて仕ても萬一右衛門七を开んな道樂者にして仕舞ひ同盟の士一同に迷惑を懸けては亡き長助に對しても相濟まぬと之より同盟の一人小野寺十内に事の仔細を語り 内藏「何うか本望を達する迄右衛門七を手許に置き充分教訓いたし呉れるやうに」と頼みましたので十内も快よく承諾いたし 十内「決して御心配には及ばぬこと某御引受けゲせしからは御安心下さるやうに」との挨拶で御座いますから早速右衛門七を一間に呼び 内藏「此處は敵の間者が目を付けて毎日の如く樣子を窺ひに參るゆゑ其方が此處に居ては又何

かのさまたげと相成らんも斗られず」と之れより十内の許へ送りまして充分教訓をいたしましたに依り討入りの時も天晴れなる働をいたし若年に似合はしからぬ手柄を顯はしました親は死んでも我子は父の遺志をつぎ後世に至るまで忠孝の名を顯はしましたは實に嘉すべきのことで御座います未だ〳〵義士の中にも非常なる辛苦を積んで亡君の御恨みを晴した者は數多く御座います故一ト先結局と致します永々御退屈を掛けました次は義士銘々傳として講演致し升

赤穗義士雪の曙（終り）

明治四十五年二月十二日印刷
明治四十五年四月一日發行

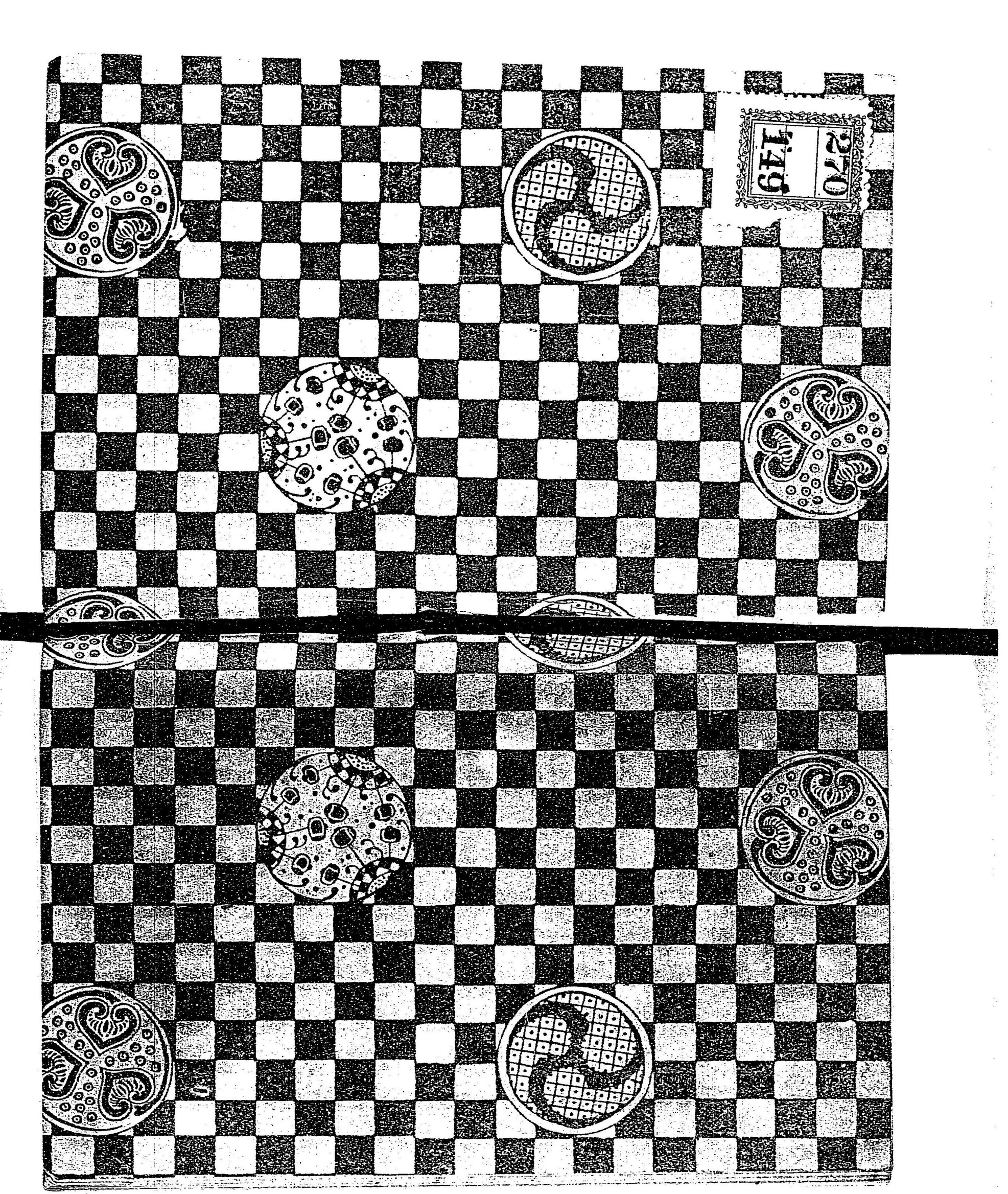
編纂者　講談倶樂部

發行者　東市淺草區旅籠町二丁目七番地　中村惣次郎

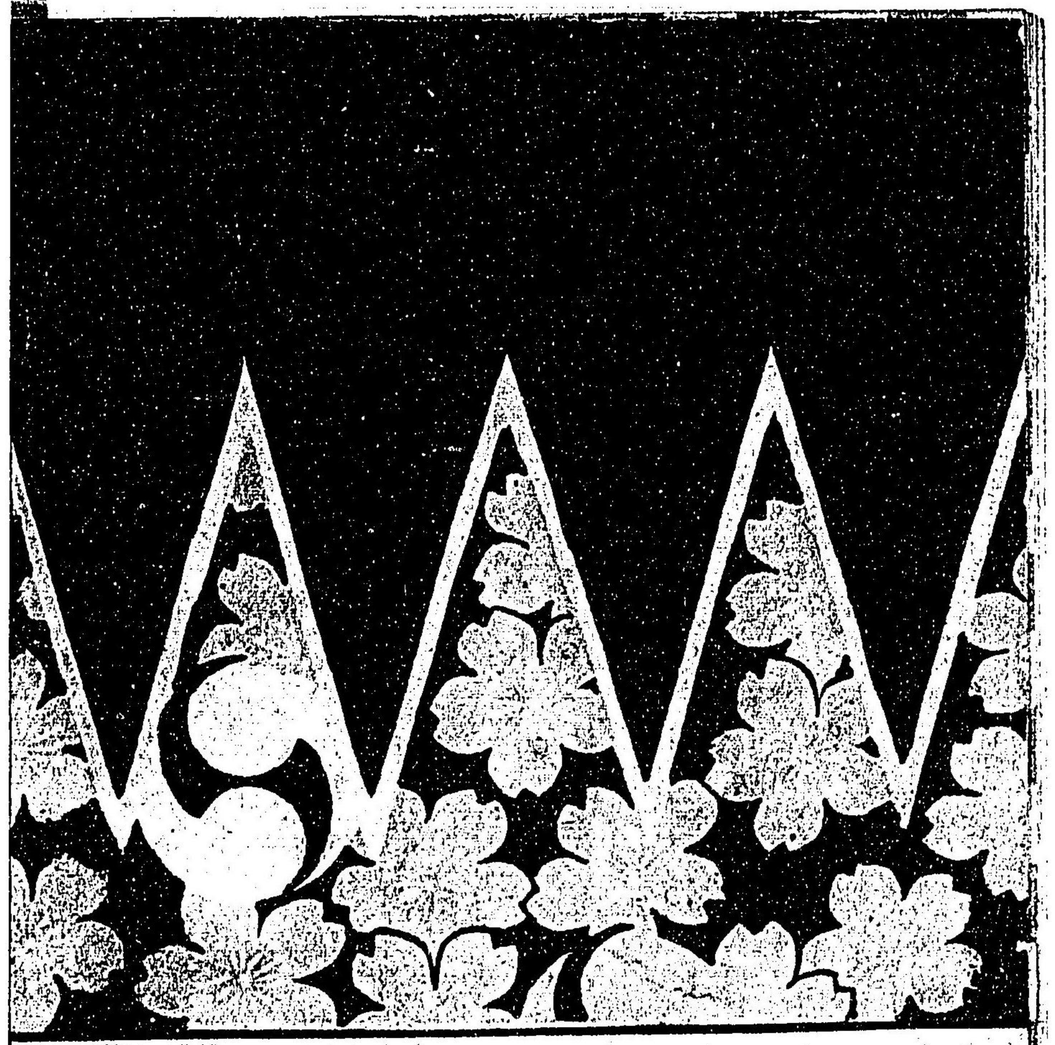
印刷者　東京市神田區松住町五番地　菅井十一郎

發行所　東京市淺草區旅籠町二丁目七番地　日吉堂

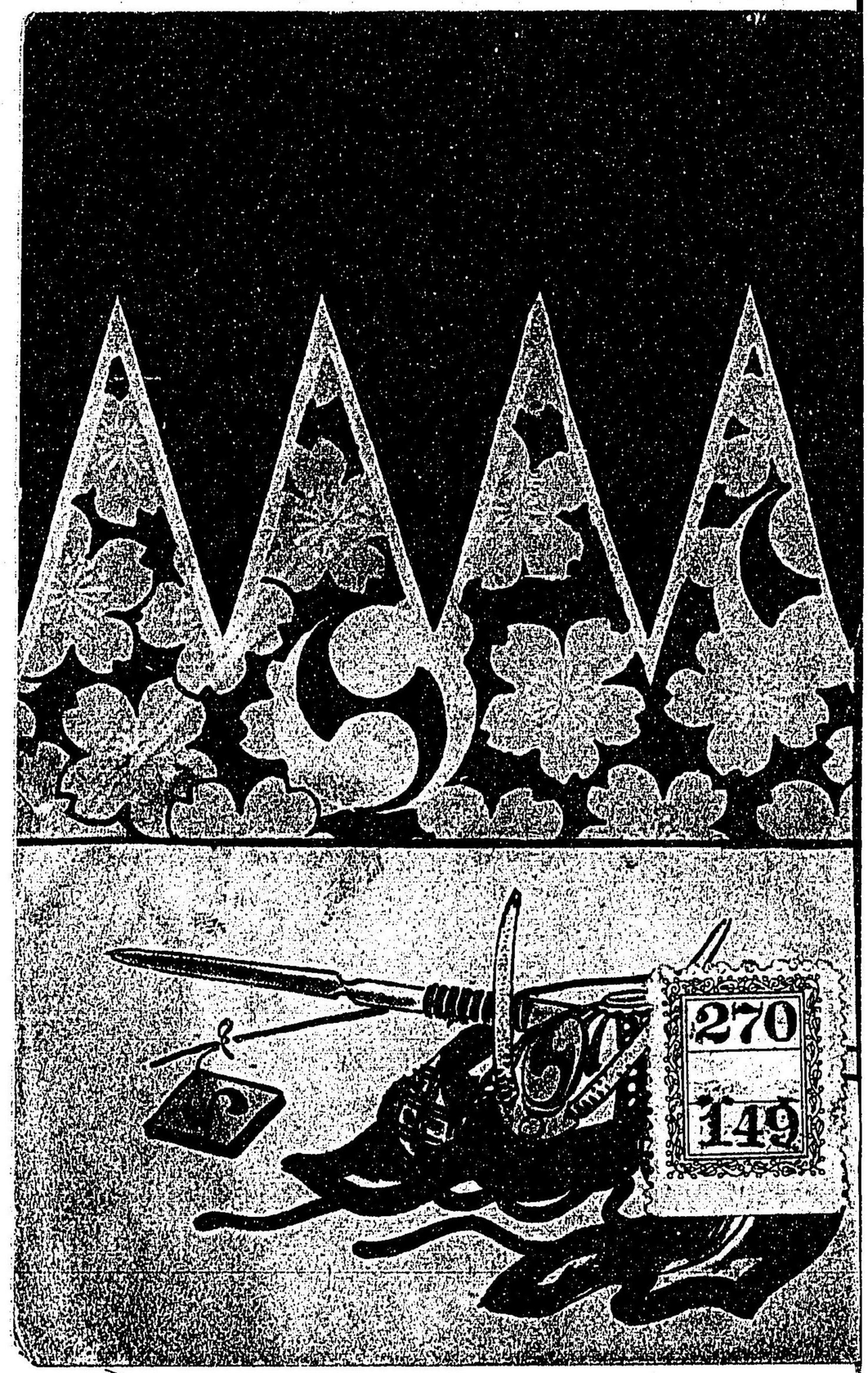
不許複製



270
119



東京国吉堂發行



097818−000−8

特63−386

雪の曙（赤穂義士）

講談倶楽部／編

M45

DBS−1757